事也。宿衣とは衣冠の事也。衣冠直衣は、宿直とのゐさうぞくとて晴にはあらざる也。ひのさうぞくの事、まち〳〵說あれども、すでに下がさねなどひきちらされたりとあれば、ただしく束帶とはきこえたり。

わびしげに見ゆる物といへる段

雨のいたくふる日、ちひさき馬にのりて、前駈したる人のかうぶりもひしげ、袍も下がさねもひとつになりたる、いかにわびしからん。

義按、いかに雨ふりたりとも、今の世のかうぶりならばひしげまじ。いにしへと今のことなるをしらしめんとこゝにあげたり。

頭辨の御もとよりとて、主殿司などやうなる物を、しろきしきしにつゝみてといへる段

きぬなどに、すずろなる名どもつけけんいとあやし。きぬの名に、ほそながはさもいひつべし。なぞかざみはしりながといへかし。をのわらはのきるやうに、なぞかちぎぬはみじかききぬとこそいはめ、されどそれはもろこしの人のきるものなれば、

うへのきぬのはかまさいふべし。下がさねもよし。又おほくちながさよりくちひろければ、はかまいとあぢきなし。さしぬきもなぞあしぎぬもしは、さやうの物は、あしぶくろなどもいへかし。

義按、細長はかりぎぬのくびかみのやうにたてて、三はたばりの物也といへり。こゝをもて、細長はさもいひつべしといへるなるべし。さくらの細長、なでしこの細ながなどと或記にみえたり。又かざみ下の段、かざみはといへる所に、春はつゝじ、櫻、夏は青くちば、朽葉といひ、上の段作物所の別當する頃といへる所の中に、櫻のかざみ、萌黃こうばいなどいみじく、かざみながくしりひきてといへり。こゝをもてかざみは、しりながといへかしといふなるべし。新葉集兼昌が歌に、「もろ人のあそぶなる哉乙女子がかざみのすそのながき世ぞかし」と、みえたり。雅すけ裝束抄に、着用の次第より裁縫までくはしくしるせり。又からぎぬ下の段、からぎぬはといふ所に、あかぎぬ、ゑびぞめ、もえぎ、さくら、すべてうすいろの數々みえたり。禁秘御抄に、上臈不レ謂二是非一。二三位典侍號二上臈一着二赤青色一候二御陪膳一也と見えたるも是也。雅すけ裝束抄曰、上臈の女房のいろをゆるといふは、青いろ、赤いろのをりものからぎぬ地ずりの裳を着るなりと

いへり。此事紫式部の日記にも委しくみえたり。されど此書のためにはいさゝか心ありて、源氏によりたる註釋までも用ひ侍らざる也。和名抄に、背子としるして、和名からぎぬと訓じ、形如二半臂一無二腰襴一之袷衣なりと見えたり。こゝをもてなぞから衣は、みじかききぬとこそいはめといへる成べし。又うへの衣、和名抄に袍、和名うへのきぬ。一朝服とみえたり。又下がさねもよしとは、名目にたがひなく、うへのきぬの下がさねなればなり。下の段、したがさねはといへる所に、冬はつゝじ、かいねりがさね、すわうがさね。なつはふたあゐ、しらがさねとみえたり。又大口ながさよりくち廣ければとは、いにしへの裁縫今にことなるもしらねど、もし小口の袴に對して大くちといふにや。其こぐちの袴は、主上御鞠あそばすとき着御のよし大槐秘抄に見えたり。又袴いとあぢきなしとは、神代卷に、投二其褌一これを開嚢神といへる下心にて、あぢきなしといへるにや。又さしぬき、あしぎぬ、足ぶくろなどいへかしと、一狂言綺語、一興有文章也。和名抄には、奴袴としるしてさしぬきと和訓せり。雜令に、宮戸奴婢三歳以上、毎年給二衣服一條に、冬布襖袴と見えたり。是などによりおこれるにや。西宮記に、古時有レ制。臣下不レ用。近代五位以上及昇殿六位皆用レ之とみえたり。其古時有レ制

とは、もと奴の袴なるゆゑにや。蓋後世織物・綾・平絹等をもて裁縫し、若壯より老者に至るまで、深淺色をわかち、上皇親王よりはじめ奉り、攝清諸家にいたりて、地文織やうの品々、裝束諸抄にくはしくしるし給ひ、已に一の制となれり。しかれば今さらいふべき事聊もなし。但此書の下の段、さしぬきはといへる所に、むらさきのこきうすき、夏は二藍、いとあつき頃、夏むしの色したるも涼しげ也とみえたり。又まさすけ裝束抄に、夏のさしぬき、二藍、るり色、うすいろ織、あさぎ、しをんいろと見えたり。夏むしのいろしたるとはるりいろをいふにや。

うらやましきものといへる段

女のつぼさうぞくなどにはあらで、ただ引はこえたる。

義按、引はこえたるとは、ひきあげたる也。男の束帶するに、うしろの三角の所をばこえといへり。其かんがへにもならんかしと爰にあげたり。

雪たかう降りてといへる段

五位も四位も、色うるはしう、若やかなるが、上のきぬの色いときよらにて、かは

和名抄曰、金・隠・起・帯。唐令云、左右金吾大將軍各一人紫襴襠、金・隠・起・帯。後二條關白記、寛治七年三月廿日丁酉、霜降晴卯時裝束、辰刻參二六條院一、予櫻前打下重袴地平緒螺鈿鈕、隠・物・隠・女・帯云々。

のおびのかたつきたるを、とのゐすがたにひきはこえて、むらさきのさしぬきも、雪にはえてこさまさりたるをきて、あこめの紅ならず、おどろ〳〵しき山ぶきを出して、からかさをさしたるに、風のいたく吹て、よこざまに雪を吹かくれば、すこしかたぶきてあゆみくるふかぐつ、はうくはなどのきはまでゆきのいと白くかゝりたるこそをかしけれ。

義按、かはの帯のかたつきたるとは、有文の帯と聞えたり。腰帯類 和名抄曰、唐衣服令云、革帯玉鉤注云、令按革帯以二其所レ附金玉石角等一爲レ名。有二白玉帯、隠文帯、馬腦帯、波斯馬腦帯、紀伊石帯、出雲石帯、越石帯、班犀帯、烏犀帯、散豆帯等一。其體有二純方丸鞆櫛上等之名一。革帯是其惣名也。と見えたり。又「とのゐすがたにひきはこえて、むらさきのさしぬき」とは、是布袴といふなるべし。雅すけ裝束抄に、ほうこの事、きぬさしぬきうるはしくきて、其うへにしたがさねきて、うへのきぬにしりつくりて、おびさしてさくをもつなりとみえたり。又「あこめの紅ならず、おどろ〳〵しき山吹を出して」とは、是紅のふるびて、黄いろに見ゆるをいへるにや。下の段、ひとへはといへる所に、色黄ばみたるひとへなどきたるは、心づきなしといへるに同じ。又寶物集に、「紅の鬱の涙のいかなればはてはくちばと成るぞかなしき」と右大辨親宗のよめる心也。其あこめとは赤染の略訓なるべし。正式は紅なるが故なり。こゝをもて、或もえぎ、或薄色なるは、染あこめといへり。あこめの字、延喜式には、單の襠 袷襠と見えたり。其外裝束諸抄、多は袙の字をもちひ、或は袍の字を用ひらる。文字のこゝろによれば、延喜式可ならんか。猶たづぬべし。又ふかぐつ、はうくはなどのきはまで、雪のいと白くかゝりたるとあれば、半靴も雪のときはくにや。騎馬のときならでは用ひざるやうにおぼえたり。仍りてこゝにあげたり。

隠帯、北山抄、女裝束上略其諸帯、紫袍生合如二袍紙一。闕腋縫レ形不レ用レ帯。用レ紫

御經のことにあすわだらせおはしまさんとてといへる段

采女八人、馬にのせてひき出めり。青すそごの裳、くたい、ひれなどの、風に吹やられたるいとをかし。ぶぜんといふうねめは、くすししげまさがしる人なり。えびぞめのをり物の、さしぬききれば、しげ正は色ゆるされにけると。

義按、裙帯は肩にかけ、領布は項の餝のよし或記にみえたり。今の世にはありとも、きゝおよばぬなり。又女のさしぬき着る事は、是馬にのれば也。いにしへは掌侍命婦も、馬にのれる例あり。又しげ正はいろゆるされにけるとは、延喜彈正

13768

是位驗也。義按衣服令云二品帯二是也乎。領布、延喜殿饗式、中宮春季篇云、領巾四條、料參三尺六寸條別九尺。

式に、凡婦人得レ着二夫衣服色一といへる、下心にて采女豐前が、えび染の織物のさしぬき着たるゝ、たはぶれていへるにや。

上の段、まつりの比はといへる中に、

けいしぐつなどのをすげさせ、うらをさせなどもてさわぎ。

義按、けいしぐつとは、履子とかけり。和名抄、沓の部、山槐記等にもみえたり。これは染ぬりのあしだをいふにや。古き賀茂まつりの圖にも見えたり。枝あふぎといへる段に、高きけいしをさへはきたればといへるもこれにて、よくきこえたり。異邦のおこりは、晋文公臣、介之推が事にはじまれり。此一段は、上の段の文なれば、發端にもかくべきを、予がなせる趣向は、衣服の事にて筆をとどめて、其餘のことは略しけるに、或人此儀分明ならざるよしにてたづねられしを、又ここにしるせるのみ。

清少納言枕草紙裝束撮要抄終

昭和九年五月三十日　第一刷發行
昭和二十三年六月十五日　第八刷發行

枕草子下卷
定價四拾五圓

校訂者　池田亀鑑
東京都千代田區神田一ッ橋　岩波書店内
編集者　布川角左衛門
東京都千代田區神田一ッ橋二丁目三番地
發行者　岩波雄二郎
東京都新宿區市ヶ谷加賀町一丁目十二番地
印刷者　小坂孟

發行所　東京都千代田區神田一ッ橋二ノ三　岩波書店
會員番號A一〇九〇〇四號

大日本印刷・永弁製本

トエ18-68

讀書子に寄す

——岩波文庫發刊に際して——

岩波茂雄

眞理は萬人によつて求められることを自ら欲し、藝術は萬人によつて愛されることを自ら望む。昔ては民を愚昧ならしめるために藝術が最も狹き堂宇に閉鎖されたことがあつた。今や知識と美とを特權階級の獨占より奪ひ返すことはつねに進取的なる民衆の切實なる要求である。岩波文庫は此要求に應じそれに鞭まされて生まれた。それは生命ある不朽の書を少數者の書齋と研究室とより解放して街頭に隈なく立たしめ民衆に伍せしめるであらう。近時大量生産豫約出版の流行を見る。その廣告宣傳の狂態は姑く措くも後代に貽すと詩稱する全集が其編輯に萬全の用意をなしたるか。千古の典籍の飜譯企圖に敬虔の態度を缺かざりしか。更に分賣を許さず讀者を繫縛して數十册を强ふるが如き、果して其場言する學藝解放の所以なりや。吾人は天下の名士の堅に和して之を指摘するに躊躇するものである。この秋にあたつて岩波書店は自己の責務の愈重大なるを思ひ、從來の方針の徹底を期するため既に十數年以前より志して來た計畫を愼重審議この際斷然實行することにした。吾人は能をかのレクラム文庫にとり、古今東西に亙つて文藝哲學社會科學自然科學等種類の如何を問はず、苟も萬人の必讀すべき眞に古典的價値ある書を極めて簡單なる形式に於て逐次刊行し、あらゆる人間に須要なる生活向上の資料、生活批判の原理を提供せんと欲する。この文庫は豫約出版の方法を排したるが故に、讀者は自己の欲する時に自己の欲する書物を各個に自由に選擇することが出來る。携帶に便にして價格の低きを最主とするが故に、外觀を顧みざるも内容に至つては嚴選最も力を盡し從來の岩波出版物の特色を全發揮せしめようとする。この計畫たるや世間の一時の投機的なるものと異り、永遠の事業として吾人は微力を傾倒しあらゆる犧牲を忍んで今後永久に繼續發展せしめ、もつて文庫の使命を遺憾なく果さしめることを期する。藝術を愛し知識を求むる士の自ら進んで此擧に參加し、希望と忠言とを寄せられることは吾人の熱望するところである。その性質上經濟的には最も困難多き此事業に敢て當らんとする吾人の志を察して其達成のため世の讀書子とのうるはしき共同を期待する。

昭和二年七月

終